

日本音楽集団

PRO MUSICA NIPPONIA

第162回定期演奏会
The 162nd Regular Concert

2001年コンサートシリーズ
未来への波

時空を超えて I
Beyond Space-time I

企画 吉村七重

2001年1月26日(金)午後7時開演 津田ホール

■主催：特定非営利活動法人日本音楽集団

■助成：文化庁・日本芸術文化振興会

舞台芸術振興事業



Arts Plan 21



芸術文化振興基金

田村拓男

21世紀初の定期演奏会です。日本音楽集団は、1964年東京オリンピックの年に創立されましたので今年で37年目になります。ながらうことだけに意義を覚えるものではありませんが、その時その年を、その時のメンバーが自発的に企画し、創造と演奏を展開してきた積み重ねがそこにはあります。

村岡実、横山勝也、宮田耕八朗の三氏が興した東京尺八三重奏団の活動が土台となり、作曲家三木稔、長沢勝俊氏らの呼びかけで流派を超えて集まった若手邦楽演奏家ら14人。付けた名前がナント「日本音楽集団」！。日本音楽の集団なのか、日本の音楽集団なのか...？いずれにしてもデカイ名前を付けたものだ...。新しい合奏の在り方を巡っての問題点を毎晩徹夜で議論したことが思い起こされます。現在のメンバーは、研修生も入れて70名。過去在籍ないしは何らかの関係にあった人たちを数えますと、千や二千ではきかない人数になると思います。これらの方々が多方面で活躍されていることを考えますと、日本音楽集団の結成と活動の意義は大きかったと思います。最近も若くて有能な演奏家や三木稔、長沢勝俊氏らに次ぐ若手作曲家ら多数の出現があり、今後これらの人々が加わって幅広く多彩な企画が続くことでしょう。2002年からは、学校の教育音楽に和楽器が導入されるなど、21世紀はますます楽しい世紀になりそうです。どうぞ、一層のご支援を賜わりますようお願い申し上げます。

ひとこと

吉村七重

日本音楽集団の新世紀は<未来への波>と名づけた新シリーズ『時空を超えてI』としてはじまりました。貴重な過去のレパートリーの演奏に新たな気持ちで臨む、優秀な若手演奏者育成、内外の作曲家を巻き込んで新しいレパートリーを創るなど、日本音楽集団37年の歴史を踏まえて、過去、現在、未来をみすえたシリーズにしてまいります。

本日前半は若手作曲家、柴山拓郎、秋岸寛久、田村文生各氏それぞれの小編成アンサンブルで、御三方がどのような考えで邦楽器にアプローチし、描いたか大いに期待するところです。後半は、西村朗氏29歳の時の作品で最初の邦楽器作品～二十絃箏独奏のための～「タクシム」、三木稔氏36歳の作品で集団の十八番「古代舞曲によるパラフレーズ」をお楽しみ頂きます。

シリーズ2回目の『時空を超えてII』として行われる5月16日の第163回定期演奏会も十八番と新風の見逃せないコンサートですので、是非又、お出かけ下さいますようお願い申し上げます。

一、スルー・ザ・ウィンドウ～笙と3面の箏のための～(委嘱・初演) 柴山拓郎作曲

SHIBAYAMA Takuro : **Through the Window** - for Sho and Three Koto

[笙] 真鍋尚之 [二十絃箏] I 桜井智永 II 田村法子 III 徳野礼子

私たちが、日頃慣れ親しんでいる西洋の楽器は、不器用さや発音上の癖をいかに取り除くかということ念頭に長い年月を経て発展してきた。例えば、バロック時代の楽器であるヴィオラ・ダ・ガンバは、チェロのような楽器を座った状態で両足に挟んで演奏する。弓はチェロとは反対に下から持つ。チェロに比べて、速いパッセージを弾くときに、弓の持ち方や弦の緩い張力も作用して、運動神経の鈍さ故の独特の癖が現れる。こういった癖というものは、いかなる楽譜にも記譜できないし、西洋の楽器はこういった「楽譜に現せない」各種の癖を出来るだけ取り除き、楽譜と楽器と再現される音楽のそれぞれの関係に論理的な整合性を持たせるべく発展したと言える。ところが、邦楽器は、このような楽器の持つ運動上の限界からもたらされる性格(いわば、意図的に発展させられなかった性質)自体が、日本の伝統音楽を根本から支えていたといえる。そこに、西洋の音楽が求めた音のあり方と、日本の伝統音楽が求めた音のあり方の違いが見えてくるのではないだろうか。この曲でも、私の他の作品同様、時間の中での音響的なエネルギーの推移の方向性を追うと言った聴取の仕方を聴き手に要求するのではなく、音をいかに時間というスクリーンの中に淡々と投影していくかと言うことを念頭に置き作曲した。西洋文化的な意味合いでの音楽構造の「機能性」は希薄であるが、音と音との関連性(ピッチやリズム)を単純かつ抽象化することで、個々の音は緩やかに日常と非日常、現実と非現実の時間の狭間を漂う。今回、素晴らしい初演の機会を頂き、吉村七重氏と日本音楽集団にこの場をお借りして心から御礼申し上げます。

(柴山拓郎)

二、トポロジカル・スペース(委嘱・初演) 秋岸寛久作曲

AKIGISHI Hirohisa : **Topological Space**

[尺八] 添川浩史 [三味線] 柘家七三 [二十絃箏] 山田明美 [十七絃] 城ヶ崎美保

[打楽器] 白柘美智代

邦楽器にはそれぞれに異なる特性と強い個性があり、また、背景を持っています。それが一般的な洋楽器と違う、邦楽器の大きな特色であって、それらをどこまで保持し、それぞれの世界をどこですり合わせるかという、洋楽器にはない難しさとおもしろさを生み出しています。日本の音楽、日本の心などということを考えていると、やはり西洋的でないもの、非合理性、不確定性などが目についてしましますが、あまりそちらに傾きすぎるのもよくありません。確かに特徴的な一面ではありますが、そうではない日本の音楽も多く存在するわけですし、日本人にはとても合理的な面もあるわけですから。

そういったことを考えるようになってから、私の邦楽器に対する姿勢が少し変わってきました。違う世界を持った楽器が合奏をするときに、すり合わせが行われると、妥協が生じます(妥協しない、という方法もありますが、私は妥協する方が自然で日本的であると思います)。編成が大きくなればその度合いも増して、楽器はただの発音体に近づき、洋楽器の感覚になっていきます。以前はそういったことは漠然と、よくないこと、避けるべきことと思っていましたが、今では当然のことと考えるようになりました。外国の音楽を取り入れ、吸収、消化を繰り返してきた日本音楽なので、西洋的な発想や考え方を避けることの方が不自然な気がしてきたからです。

「トポロジカル・スペース」とは数学用語で、その本当の意味は私もよく理解しているわけではありませんが、「外見をどのように変形しても、本質は変わらない」といった程度の意味合いでタイトルにしました。拍子感のない自由な部分と、拍子の枠の中で正確なアンサンブルが要求される部分。個々の楽器がそれぞれ主張しあう部分と、協調する部分など、いろいろな対比が盛り込んであります。私とほぼ同世代のメンバーによる、息のあった演奏が楽しみです。

(秋岸寛久)

三、セレナード第2番(1998年・第1回国立劇場作曲コンクール入選作品) 田村文生作曲

TAMURA Fumio : Serenade II for Ensemble

[笙] 真鍋尚之 [箏] 西原祐二 [尺八] 米澤浩 [胡弓] 多々良香保里

[三味線] 工藤哲子 [二十絃箏] 熊沢栄利子

ある楽器のために作曲するときには、歴史的背景とどう距離をとるかということが課題となるが、この作品で初めて日本の伝統楽器のために作曲したことは、私ができることを再認識する良い機会であった。それまで西洋的音楽にどっぷり浸かって、所謂日本の伝統音楽に関する知識は皆無と言ってよいほどだったのだが、結局のところ私にとっての日本の楽器は、西洋のそれと殆ど変わらなかったばかりか、それまでに興味のあった西洋的現代音楽と(私の中で)共通する部分が多く、何の違和感もなかったのだ。それは多分、日本の楽器がどちらかというと原始的(合理的でない)で、音色の中の非音程的要素(例えば「五線譜で表現できない情報」)が多かったことが私の興味とほぼ完全に一致し、対象とすべき新たな素材を(遅れ馳せながら)見つけたということであろう。

この「セレナード第2番」(この作品の前に、ほぼ同じ方法で西洋楽器アンサンブルのために「第1番」を作曲した)の主要を占める、楽器間の時間関係が曖昧な部分では、各楽器の音高やリズムは厳密に記譜されながらも、そのテクスチャーはある程度曖昧に配置されているため、複数の楽器の「確定的な音」による合奏の形態としての「不確定な全体」が生み出される。しかし一方で、バッハがコラール旋律を用いた如く、曲頭及び曲尾で提示されるユニゾンでは、ヘテロフォニー的な「ずれ」は極力排除される。例えば雅楽が一つの旋律を基礎としながらも、楽器の特性によって「少し異なる旋律」が合わさった全体の響きを持っているのに比べ、ここで各楽器固有の「癖」を可能な限り排除し、「まったく同じ旋律」を演奏することが要求される。これは音を事前に(楽器としての)特質を持たない素材として抽象化し、楽器と音楽様式の歴史的必然性から意識的に離しているというべきかも知れない。それに対してほとんど和音のみによる中間部は、まったく違う音色の組み合わせをそのまま聴く部分である。ユニゾンの部分では「音色」が抽象化されたが、これは「構造」の抽象化あるいは単純化と言うべきだろうか、その単純性は耳が楽器の音色の特質を区別することを助け、音色の細部へ聞き入ることを可能にするだろう。

1998年、国立劇場作曲コンクールのために作曲、入賞。

(田村文生)

・ ・ 休憩 ・ ・

四、タクシム～独奏二十絃箏のための～(1982年) 西村朗作曲

NISHIMURA Akira : TAQSIM

[二十絃箏独奏] 吉村七重

タクシム(TAQSIM)は、アラビア音楽における即興演奏の意で、カーヌーンやウードといった楽器により、奏者は基本になる旋法を用いて、自由に曲想を綴ってゆく。この曲も即興的性格を持っており、またアラビア音楽を思わせる旋法を用いている事もあって、思いきって「タクシム」と名づけた。

豊穡な響きを秘めて静止する二十絃箏の、ゆるやかに弧を描いて張られた絃の連なりは、あたかも澄みわたった湖面のようであり、様々な情感が風となって吹き来たり、その湖面を波立たせて通りすぎる——そういうイメージを抱きつつ書き綴った。初演時に吉村さんはこれを鏡のような曲だといわれた。その後、「鏡」は磨かれ、そこに映ずる吉村さんの姿は凜として鮮烈なものとなった。初演<吉村七重第2回二十絃箏リサイタル>

(西村朗)

五、古代舞曲によるパラフレーズ(1966年) 三木稔作曲

MIKI Minoru : Paraphrase after Ancient Japanese Music

[笛] 竹井誠 [尺八] I 宮田耕八朗 II 三橋貴風 [三味線] 箕田司郎

[琵琶] 田原順子 [箏] I 吉村七重・早川智子 II 山田明美・久本桂子

[十七絃] 宮越圭子・中垣雅葉 [打楽器] 尾崎太一・白杵美智代

[ソプラノヴォーカリーゼ] 佐竹由美(客演)

いきなり私事で恐縮ですが、マリimba演奏家を目指していた私が、本気で日本音楽集団との付き合いを考え始めたのは「前奏曲」との出会いからでした。西洋音楽でもなく、これまでの邦楽とも違い、しかし正に現代の日本音楽といえる響きが発せられようとしていたのでした。翌年(1966年)全曲完成とともに、この作品は作曲界や邦楽界に反響を呼び、集団の初期を画定する作品と位置付けられ、後の現代邦楽界を先導する作品になって行ったのでした。

・「前奏曲」は器楽的構成美を意図した簡潔な様式で書かれ、後に続く4曲を集約しながら、独特な古典的構成と、その中にちりばめられた民族的要素を感じさせます。

・「相聞」(そうもん)は万葉の恋の歌で、ソプラノ・ヴォーカリーゼに能管、琵琶、箏群、尺八などが、それぞれ異なった表情で重なり合い、応答し合う叙情的な楽章。

・「田舞」(たのまい)は田植えの神事の舞。三絃と篠笛以外の奏者はいろいろな打楽器を持って賑やかに打ち囃します。

・「誄歌」(るいか)は葬祭の歌。重々しい低音尺八の流れに、もう一管の尺八の衝動的な動きがからみ、箏群の響きとともに慟哭となって地の底からつきあがります。

・「姫歌」(かがい)は上代、男女が集まって互いに歌を詠みかわし、舞い遊んだことをいい、「歌垣」とも書きます。後世の盆踊りの起源ともいわれています。人間の性的本能に根差した興奮が、遠いざわめきから次第に高調して頂点に達し、やがて跛行的に去って行きます。(曲については過去のプログラムノートなどより引用)

この曲は、日本音楽集団35周年記念CDシリーズ(5/16発売)に収録されており、ソプラノ・ヴォーカリーゼの共演は、本日のゲスト佐竹由美氏です。また、本年5月27日「プラハの春」出演の際のソプラノ・ヴォーカリーゼにはチェコのゲストと共演する予定です。

(田村拓男)

次回の定期演奏会のお知らせ

日本音楽集団第163回定期演奏会

2001年コンサートシリーズ

未来への波

時空を超えてII

2001年5月16日(水) 津田ホール

企画：吉村七重

プログラム

一、組曲「人形風土記」／長沢勝俊作曲

二、萌春／長沢勝俊作曲

三、時の陽炎(ときのかげろう)～尺八、箏群と打楽器のための～／西村朗作曲

四、郢曲「鬢多々良」(えいきょく・びんたたら)／伊福部昭作曲

柴山拓郎(しばやま たくろう)

1971年東京生れ。97年東京音楽大学大学院修士課程修了。作曲を西村朗、池辺晋一郎、湯浅譲二、遠藤雅夫の各氏に師事。第62回日本音楽コンクール、第9回秋吉台国際作曲賞にそれぞれ入選。古楽器奏者と現代作曲家からなるグループ、「アルコバレーノ」、作曲家団体「深新會」に所属。昨年6月にオランダ各地で99年作曲のオルガンの作品が再演されたほか、9月には阿姆斯特ダムでCD収録された。現在、東京電機大学情報社会学科非常勤講師。映像やインスタレーションなどとのコラボレーションにも取り組む。

秋岸寛久(あきぎしひろひさ)

1962年横浜生れ。中学生の頃より作曲を助川敏弥に師事。東京音楽大学に入学し、作曲を浦田健次郎、三木稔の各氏に師事。卒業の時に作曲した《三味線とオーケストラのための協奏曲》が仙台フィル、及び日本フィルの定期演奏会で演奏される。同大学研究科を修了後、日本音楽集団に入団。邦楽器のための主な作品には《邦楽合奏のための「光彩陸離」》《響影空間～尺八、三味線、打楽器と邦楽器群のための協奏曲～》などがある。

田村文生(たむらふみお)

東京芸術大学大学院および Guildhall School of Music and Drama, London大学院修了。1995年から97年まで文化庁芸術家在外研修員としてイギリスにて研修。これまでに作品がアジア音楽祭、東京の夏音楽祭、Spitalfields音楽祭、The State of the Nation音楽祭等で演奏されたほか、Vallentino Bucchi国際作曲コンクール、文化庁舞台芸術創作奨励特別賞、朝日作曲賞などに入選・入賞。上野学園短期大学、昭和音楽大学・短期大学、東京藝術大学、桐朋学園大学各講師

西村朗(にしむらあきら)

1953年大阪生れ。東京芸術大学大学院修了。西洋の現代作曲技法を学ぶ一方で、在学中よりアジアの伝統音楽、宗教、美学、宇宙観などに強い関心を抱き、そこから導いたヘテロフォニーなどのコンセプトにより、今日までに多数の作品を発表している。日本音楽コンクール作曲部門第一位、エリザベート国際コンクール作曲部門大賞、ルイジ・ダルラピッコラ作曲賞、尾高賞、中島健蔵音楽賞、京都音楽賞「実践部門賞」、日本現代芸術振興賞などを受賞。

三木稔(みきみのる)

1930年徳島市生れ。東京芸大作曲科卒。1964年日本音楽集団・86年歌座・90年結アンサンブル・93年オーケストラアジア・97年オーラJをそれぞれ創立、今までにない創造活動を国際的に展開中。《春琴抄》から《源氏物語》に至るオペラ七連作や、《鳳凰三連》などの管絃楽曲、《マリンバ・スピリチャル》などの室内楽曲・独奏曲の多くは海外からの委嘱で作曲され、国際的なレパートリーになっている。歌曲・合唱曲・邦楽器作品多数。映画音楽《愛のコリーダ》もよく知られている。

佐竹由美(さたけなおみ)

東京芸術大学卒業。同大学院修了。中村義春、嶺貞子、小林道夫、A. オジェーの各氏に師事。在学中、第31回芸大メサイアのソリストとしてデビュー。学部を首席で卒業し、皇居にて御前演奏の栄を授かる。第53回日本音楽コンクール第2位入賞(福沢賞も受賞)。また、ロータリー財団奨学生としてイタリアへ留学。ノバラ市国際音楽コンクール第2位、バッハ国際コンクール第4位(1位なし)。宗教曲から現代作品まで幅広いレパートリーをもって活躍中のソプラノ歌手である。透明感溢れる美声と洗練された歌唱は内外で高い評価を受けている。二期会会員。東京室内歌劇場会員。

【賛助会員】

法人	(株) 全音楽譜出版社	個人	中島靖子	家永和治	岸彰則	堤紀江
	(財) 正派邦楽会			伊藤美恵子	工藤秀也	手塚愛子
	(株) 宮本卯之助商店		木津のぶ	今村厚子	後藤隆	野原清子
				今村文彦	後藤陽子	藤澤美恵
			青戸純夫	植木眞代	桜田正憲	本田実
			青柳堯	大関富枝	佐々木浩二	水野正徳
			安達眞五	太田颯衣	柴田寛二	森山俊雄
			新井克輔	大瀧進一郎	杉田和繁	山崎時男
			飯塚絹子	川壁正	田原たま	渡辺ハル

2000年12月現在

賛助会員へのお誘い

1999年10月、特定非営利活動法人日本音楽集団が発足したのを契機に、賛助会員を募集しています。多くの方々からの支援を仰ぎ、息の長い活動を目指したく、ご協力お願い申し上げます。募集の詳細はチラシをご参照ください。

本日演奏「古代舞曲によるパラフレーズ」収録CD 5月16日(第163回定期演奏会)発売(予約受付中)

日本音楽集団35周年記念CDシリーズ第Ⅳ集

「二つの舞曲」

収録曲

二つの舞曲 長沢勝俊作曲 NAGASAWA Katsutoshi: Two Dances

古代舞曲によるパラフレーズ 三木稔作曲 MIKI Minoru: Paraphrase after Ancient Japanese Music

飛驒によせる三つのバラード 長沢勝俊作曲 NAGASAWA Katsutoshi: Three Ballads to "Hida"

萌春 長沢勝俊作曲 NAGASAWA Katsutoshi: "Hoshun" for Shakuhachi and Koto

日本音楽集団第25次海外公演

「プラハの春音楽祭」中心に実施予定

今春、2001年5月下旬から6月上旬にかけて第25次海外公演を行います。

5月27日には世界有数の音楽祭「プラハの春」に招かれ、演奏することになりました。また、他にもモンペリエ(南仏)、パリ(日本文化会館共催)、ラバト(モロッコ)などでの公演が予定されています。この公演では文化庁の国際交流推進事業アーツプラン21の支援、並びに三菱信託芸術文化財団の助成を受けています。

又、国際交流基金へ助成申請中です。総勢22名のツアーで、プログラムは下記のようなものを行います。

- 一、新八千代獅子／藤永検校作曲
- 二、古代舞曲によるパラフレーズ／三木稔作曲
- 三、夢あわせ夢たがえ／吉松隆作曲
- 四、郢曲「鬢多々良」／伊福部昭作曲

お知らせ

2001年度日本音楽集団団員募集

オーディション
2001年3月21日(水)

詳細は事務局へお問い合わせください。

TEL03-3378-4741

特定非営利活動法人

日本音楽集団

〒151-0073 東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302

TEL 03-3378-4741 FAX 03-3376-2033

ホームページ URL <http://www.promusica.or.jp/index.html>

E-Mail office@promusica.or.jp

箏

二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏

日本音楽集団推薦

琴光堂和楽器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL(3792)8481 FAX(3792)8437